特別対論企画「低線量被曝と生命倫理」

趣旨説明

二〇一三年一一月三〇日から一二月一日にわたって、死生学・応用倫理センターが事務局となり、日本生命倫理学会第二五回年次大会が東京大学本郷キャンパスで開催された。大会テーマは「死生学と生命倫理」である。二日目の二五周年記念シンポジウム「低線量被曝と生命倫理」では、島薗進、加藤尚武をシンポジストとする対話型の討論がおこなわれた。

福島第一原子力発電所の事故・災害では大量の放射性物質が拡散され、福島県を中心とする広範囲にわたる地域の住民に放射線被曝に対する不安が広がっている。一方、長期間にわたる低線量被曝の影響については、専門家の間でも意見が分かれている。これに対して、日本生命倫理学会、あるいは日本の生命倫理において、これまで本格的な議論はおこなわれていない。

加藤尚武は日本に生命倫理と環境倫理を紹介した草分け的存在であると同時に、一九九六年から二〇〇一年までは原子力委員会の専門委員を務めている。原発事故後の著書『災害論――安全性工学への疑問』（世界思

想社、二〇一一年）においては、三・一一の災害、事故について取り上げると同時に、一般的に重大なリスクに関しては確率論が受け入れがたいという単独事例問題の議論を紹介している。また、素人である国民の合意より専門家の判断を押し通そうとするテクノ・ファシズムにも、民主的な討論をすれば必ず合意にたどり着けるとするテクノ・ポピュリズムにも偏らず、さまざまな専門家の認識のズレを理解し、国民的合意が成立する条件を探ることが哲学の使命だとした。また、打算的な相互性の倫理にかわって、災害復興に従事する人に見られた、もっとも弱っている人のための非打算的な献身・貢献の倫理を育てる必要があると訴えている。

一方の島薗進は、受精卵・クローン胚の作成・利用、エンハンスメントなどについて、医療を中心とする専門家に疑問を投げかけるというスタイルで、宗教学・人文学の立場から生命倫理に関する実践的考察を深めている。また、原発災害後は被曝問題についてネットやシンポジウムや著書を通じて積極的に発言し続けている。『低線量被曝のモラル』（共編著、河出書房新社、二〇一二年）、『つくられた放射線「安全」論――科学が道を踏みはずすとき』（河出書房新社、二〇一三年）などでは、三・一一後の専門家による結論ありきの安全安心論に疑問を発し続けている。

今回の二五周年記念シンポジウムの企画は、オーガナイザーである堀江が島薗に打診をし、島薗が対論の相手として真っ先にあげたのが加藤であったことから成立した。

当日の議論は、島薗が低線量被曝をめぐる政府側専門家の「安全」言説を批判したのに対し、加藤は「臨床と予防」という二つの立場があるとして専門家の領域のズレを理論化し、「安全」言説を「臨床」の立場からのコミュニケーションとして理解しようとした。

これをめぐって、ネット上でも議論が起こった（シンポジウムの名前で検索すれば容易にたどり着けるだろう）。聴衆のなかでも、加藤は両者の言い分を相対化する理論的枠組を提示したのだという理解と、「御用学

者」を擁護しているという批判の両方が起こった。そこで、オーガナイザーであり、本誌の編集委員である堀江は、改めて論文の形で議論を積み上げ、記録を残すべきだと考え、両者に原稿を依頼した。

以下には、まず事前に両者によって執筆され、大会プログラムに掲載された発表要旨をそのまま収録する。次に新たに執筆された加藤論文、そしてそれに対する島薗のコメント論文、最後に加藤からのレスポンスを掲載する。日本の学術雑誌では、海外のそれに比べると、このような対論型の企画が少ない。生命倫理、環境倫理の分野において低線量被曝をめぐる議論は、今後――被害の実態が深刻化すると予想されるだけに――ますます重ねられるべきだと考える。その際の一つの足がかりとして、今回の対論の記録が役立てば幸いである。

企画者　堀江宗正

（ほりえ・のりちか　東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター准教授）